

鹿角市小豆沢の大日堂舞楽

—「雪国の来訪神」採訪資料2—

◎採訪地 秋田県鹿角市八幡平字小豆沢

◎日 録 昭和五十五年

一月一日(火)

13::20 男鹿市門前発(バス)(曇、小雪)

14::20 男鹿駅発(男鹿線)

15::05 追分駅着 乗換え列車待ち合わせのため待合室にいると、

法螺貝の音が聞こえてくる。出てみると、五十丁の青年五、

六人がボンデンを捧げながら、三吉神社奉納梵天の寄付金

集めをしているのであった。

15::45 追分駅発(急行よねしろ4号)

18::18 八幡平駅着(花輪線)

18::20 「五の宮荘」着、宿泊、主人黒沢俊彦さんに聞く

一月二日(水)

00::20 五の宮荘↓別当家↓マカナイヤド

00::45 マカナイヤド(畠山家)(04::08)

04::16 山本家(05::00)

05::05 別当家(05::30)

05::36 フェフキダ(畠山家)(06::26)

06::30 テンノウサン(八坂神社)(06::45)

06::47 シロヤマサン(斎藤家)(07::43)

07::44 ニシノカクチ(08::07)

08::18 大日堂(12::17) (快晴)

12::25 五の宮荘着

15::50 八幡平駅発

1 黒沢俊彦さん(昭28生)の話

小豆沢のこと

こちらへんからですね、ちょうど、小豆沢あたりから、ずーっと、盆地になってるんですね、鹿角盆地ですね。もう、小豆沢から、あっちのカミは、もう、ちょうど、湯瀬あたりは、もう、ほんとの沢なんですよ、山と山の間の。

(地名ノ由来ハ)ああ、そっちのほうは、わからないですね。

(特ニツナガリノアル土地ハ)あまり聞いたこと、ないですね。

ただ、そのう、南部とかね、そうゆうあは、あのう、あっちの、田山とか、岩手県の、あっちのほうの流れだとゆう、そうゆうあは、聞いているけどもね。

今は、二百戸近くあるんじゃないですかね。いちばん多い苗字は、んーと、畠山かなあ。小豆沢がおもです、畠山は。もう、ほかは、阿部ですね。まあ、八幡平では、阿部が、まあ、すごく多いんですね。

昔は、まあ、おもに農業とですね、まあ、そのう、馬喰とゆうか、馬で働いてあったですね。馬をまあもとにして、まあ、木を運んだり、そういう仕事が多かったですね。ほれ、あのう、ウチを建てる時とか、まあ、今で言えば、土方作業ですけどもね、そういう、石とか、ね、砂利を運んだり、まあ、あの、山から木を出したりね、そういうので、まあ、働いてあった人が、まあ、多かったですね。あとは農業ですね、米作るのが。

由来譚

そのう、まあ、なんてゆうかね、そのう、ダンブリ長者とゆうのは、まあ、初めは、そのう、ぜんぜんだめだったウチが、まあ、その、神の、あの、導きによって、まあ、長者になったと、それがまあ、簡単に言えば、ダンブリ長者の、物語であって、そのう、ダンブリって、トンボのことです。シオカラトンボじゃないですか。その、神ってゆうのが、あのう、そのう、導きになって、なったものが、ま

あ、神様、その神様とゆうのは、五の宮さんですね。その、男の、

ま、皇子ですね。そして、あのう、姫が、そのう、京都、だと思っただけでもね、京都のほうから来て、その、まあ、夫婦になって、そこでまあ、あの、その、姫が、吉祥姫てんですね。そこで、この神様のあが、五の宮皇子てゆうんですね。その五の宮皇子の御神体がまあ、この権現舞であって、その、吉祥姫の、まあ、死んだ、あの、墓ってゆうかね、それが、その、あの、大日堂(大日靈貴神社)のすぐうしろの、あの、吉祥院だわけです。寺だわけなんです。でまあ、そのう、その時の、まあ、皇子が死んだ時の、そのう、あのう、なんとゆうか、葬式みたいな感じの、舞が、各その舞に付いてるわけなんです。

そのう、ウチのね、貧乏に暮らして、あのう、あった人が、まあ、そのう、神の導きの、そのう、ダンブリですね、トンボが、あのう、まあ、昼寝をした時に、口にとまったわけですね。それが、すぐく、そのう、甘い味がして、ええ、そのう、まあ、その前に、あのう、夢を見てあったんですね、その人がね。そうゆう、あのう、導きがあるから、そのう、まあ、あのう、北へ、北へ、ってゆうか、カミへですね、カミに、あの、のぼれてゆう導きがあったわけです。川上です。そうゆう、あの、神の教えが、あのう、正夢みたいな感じですね、そうゆう、あの、夢を見たそうなんです。であのう、まあ、そうゆうに、あのう、いっしょけんめい働いてる時に、あの、昼ですね、あの、昼寝した時に、そのう、ダンブリが、口に

とまったと。そして、そのう、すごく甘い、あの、味がしたもんで、その、トンボを、あの、いっしょけんめい、あのう、あとを追ってったわけですね。そのう、追ってった所が、その、今は、あのう、ですね。あそこは、田山ですね。田山ってゆうとこなんです。ずっと、あの、湯瀬越えてね。あっちのほうに行つたところが、そのう、こんこんと、そのう、酒が湧いて、湧いてるその泉に、たどり着いたとゆうですね。それがもとで、ま、あのう、長者んなつたと。

そして、そのう、すごく、こう、民家が、そこに、あの、集まつて、で、まあ、みんなが、こう、米をといだ、汁が、そのう、川になつて流れた、ってゆうのが、その、米代川、の伝えだわけですね。ほんとは、昔は、そのう、米、と書いて、白いという字を書いて、川。今は、米とゆうのと、代という字ですがね。昔は、なんか、そうい伝えがあります。長者屋敷とゆう所は、あるんですよ。国道行けばね。国道からは、あの、入らなげやならないけども、国道に、あの、看板みたいなのが、建つてますね。

そうゆうふうにして、長者になつたつてウチ、ウチってゆうかね、その場所はあるんですね。そのウチが、代々伝わってきたような感じでね。そのウチがあつてんだけどね。あそこのウチは、なんとゆうかな。ネモトってゆうんです、屋号が。小豆沢です。

組織

四つの部落があつて、まあ、ここは小豆沢ですね。まあ主体とゆうかね、そのう、あのう、本堂があるために、その、小豆沢部落

とゆうのは、もう中心の、あの、部落だけですね。まあそのほか、隣の大里部落、そしてあのう、長嶺部落、そしてあのう、谷内部落、ってゆう四ヶ部落があるわけなんです。で、その部落、各部落に、あのう、一つ一つの、そのう神様がありまして、それであのう、能衆たちが、その神様を、あの、まあ、拜むってゆうかね。大里、ってええ、まあ、あの、駒舞。駒舞ってゆうのは、馬の神様ですね。駒舞と、鳥舞、ゆうの、あの、鶏の神様ですね。それで、あの、谷内の場合、あのう、五大尊舞とって、面を、あの、かぶつてですね。あのう、五人の、ま、神様があるわけですね。で、長嶺の場合、烏遍舞とってですね。あの、その、武将の、ま、姿をした神様なんですね。小豆沢の場合は、まあ、ほんとの、こう、御主人とゆうかね。もう、御神体だわけなんです。五ノ宮神社の、その、五の宮皇子の、御神体ってゆうかね。そうゆう、あれがあつて、まあ、権現舞ってゆう、あれなんです。それがあのう、まあ、見ればわかるとおり、獅子舞なんです。それが、その獅子が、まあ、移り変わってゆうかね。その、ほんとの五の宮皇子の、まあ、移り変わらだわけですね。で、ま、中心、とゆうかね。そうゆうあれは、ま、小豆沢のその、権現舞、なんです。だから、ほかのは、まあ、それに付いた、その、まわりの神様、てゆうかね。その、小豆沢のその御神体、の、付き人てゆうかね、そうゆう神様なんです。ま、その、小豆沢の、その権現舞を守る神様になつてますよ。そいであのう、二日、まああしたですね。あし

たの朝八時頃、ちょうどあの、この大日堂本堂に、その四ヶ部落が、あのう、合流するわけですね。まあ、それまでの間は、まあ、各部落、あのう、分れて。そいであのう、二部落ずつ、あの、合流して、我々小豆沢部落は大里部落と合流しまして、長嶺は谷内部落と合流して、で、二部落ずつ、あのう、逆方向から来るわけです。それで、あのう、ちょうど八時頃、この大日堂に、四ヶ部落が集まるわけですね。

まあ、保存会とゆうのがあってですね、各部落に。その各部落のまた、理事って人たちがあつてですね、で、常日頃からそうゆ理事の人たちが集まっていますね、まあ、いろいろ検討してらるわけですね。会長は別当さん。神主さんのことを別当さん、とゆうんですね。安倍洋直さんです。昔は、まあ、なんてゆうか、世話人と書いてるんですね、昔の、そうゆ書類を見ればね。(世話人ノ中心ニナルノハ)なんてったつけなあ。あ、オトモとゆうんですね。まあ、あの、神様の、ほんとの身近かな、その、オトモとゆうんですね。(オトモノ家ハ昔ハ)まあ、決まっていたんだけど、最近はやっぱりね。そいで、まあ、おもに、そのオトモをやる人とゆうのは、長老ですね。まあ、小豆沢の場合、あの、ほんとの長老とゆうのは、少なくとも、もういなくなつたんですね。だから、ま、阿部富五郎とゆう人が、やつてるわけなんですけどね。その、神様を舞う、その、ウチってゆうのも、決まってるわけなんです。もう、よほどのことがないかぎり、代わることがないですね。小豆沢の場合、まあ、十四、五軒ですね。それはね、島山与七

郎さんですね、そこは、まあ、昔からの、まあ、笛吹きの中ね。まあ、今年も、その与七郎さんと、その息子さんが、あの、二代で笛を吹くんですね。まあ、そのほかに二人ほどおりますけどね。で、あとは、その、ほんとの御神体、権現舞ですね、それを舞うウチは、阿部賢三郎さんでゆう、そのウチももうかなり古いウチですね。そいで、あのう、稲村隆良さんですね、今たたいっているんだけど、まあ、鼓ですね、太鼓の役です。そのウチも、昔から太鼓のウチですね、代々。そいで、あのう、も一人は、阿部甚吉さんでゆう人で、その、田楽舞とゆうのがあるんですよ、その舞の小鼓の役なんです。そこも、もう、昔からの、そのう、あのう、同じ役を、代々伝わってるわけですね。で、ウチの場合は、まあ、その権現舞の獅子の、オガラミですね、そのまあ、ウチなんです。獅子の尾ですね、しっぽを、あの、からむわけです。まあ、それは、まあ、決まっていんだけど、まあ、代々やってくるよな状態なんです。ウチの場合は、まあ、そのほかはね、ふつうのまあ、能衆ですね。そういう人たちも、もう、昔から、あの、代々、伝わって、やってきてるんですね。どうしてもね、あのう、人数が、足りなくなる年があるんですね。そういう時は、やっぱり、なるべく、その、身内の中から出したいってゆう、あれもあるんだけど。そういう時は、まあ、どうにかつなぐんだけどもね。

そのほかの人たちは、モミオシですね。あれは、そのう、ま、な

んとゆうか、ザイドウ、大日堂舞楽の、中の、そのう、ま、一つの、まあ、だしものつてゆうかね、付き物なんですすよね。そのう、舞楽、にはもう、昔っからの、ええ、付き物なんですすよね。まあ、それにも、まあ、いわれはあるんですすよね。それは、あのう、まあ、昔の、なんとゆうか、能衆、てゆうかね、そういう人たちがそのう、靱です、あのう、米の、そのう、俵を、あの、押す、つてゆう、まあ、そういう意味があるんですすよね。だから、そゆう、舞にも、一つ一つの舞にも、意味があるし、ええ、それをつなげば、こう、まあ、伝説ができるわけなんですすよね。ええ。そこまでゆうとなれば、もう、すごく時間がかかるんですすよね。もう、あのう、昔はです、あのう、谷内部落と、ほんとの昔は、四ヶ部落から、あの、若者たちが集まってやっただけなんですすよね。今あ、もう、小豆沢だけ、の青年たちがやっただけですすよね。ま、そのう、その中の、決まってるね、能衆の人たちの中の、また、若者出てくるウチもありますすけどもね。ええ、まあ、あの、本人の弟とかね、息子とか。それはもう、決まってるんですすよね。あのう、人数が、あの、揃えるために、もう青年が少なければ、もう高校生から、中学生からも引っぱり出して、もう、それでもやっぱりね、あの、伝統てゆうものは守ってかなきゃならないとゆう、そのう、信念でやっただけですすよね。

継承

まあね、オヤジがこう、いるウチでは、代々、こうね、伝わ

て。ウチもまあ、オヤジがいた時は、まあ、教えてもらって。それでまた、やっぱり毎年、ほれ、二十日とか、二十六日、八日、集まる時に、その、年寄の人がです、年配者の人たちから、まあ、手取り足取り、聞いて、そして覚えてるんです、ええ。

親子二代でやってもええわけです。まあ、ウチの場合は、あのう、もう初めてだつて言われたんだけどね、ウチのオヤジと、そのう、お爺さんです、そのまたお爺さんです、その三代が、あの、いっしょに、あの舞った年が、一年あるんです。でもう、始まって以来、だつてゆう、あのう、言われたんです。親子三代で舞った年があつたんです。それはもう、いちばんのお爺さんが八十九歳ですか、次が六十歳ぐらいです、次が二十二、三ぐらいの、ま、ウチのオヤジが二十二、三の時です。ええ、三代、舞った年があるんです。それが、いまだかつて、まあ、そゆう、あれはないとゆうふうにね……。ウチの場合は、ふつうのホンマイ（本舞）です。いや、その、ホンマイってゆうかね、あのう、まあ、ほんとのホンマイってゆうのは、あのう、神様の、あれです。舞なんだけども、まあ、我々は、まあ能衆とゆうかね、その神様の付き人みたいな感じ、なるわけです。まあ、そのう、各、その、人は昔っからの、そのウチってゆうのがある、もう、あるわけです。そのう、その、ま、ウチ、わたしも、七代目ぐらいですすよね。ま、舞うのは、長男です。

まあ、年には、ま、制限はないんですけども、やっぱり、自分の気持

ですね。気持と、もう、体ですね。自由がもうきかなくなればね。エ。あとは、やっぱり、ほれ、あのう、自分の身内の中で、あのう、不幸事があったり、まあ、あの、子どもを生んだ、ま、そうゆ人があったりすれば、まあ、その年は遠慮するわけなんです。(身内ノ人デヤレナイ場合)そなればやっぱり、ほかの能衆の人たちの、身内ですね。そうゆふうに、もう、正してやるわけですから。

練習と準備

二十日には毎年もう、能衆たちが集まるんですね。集まって、まあうち合わせみたいな形ですね。あのう、小豆沢は、この大日堂に集まるわけです。そいであのう、小豆沢の場合は、あと二十六日と、二十八日、あの、ウチナライといって、その、能衆たちが、あの、集まって、まあ練習かたがたみたいな形ですね。それでもまあ、行事には入ってるんだけどね。だけでも、まあ、この、二日のための、まあ、練習みたいな形になってるわけなんです。まあ、その部落によってね。そのう、小豆沢の場合は二十六、二十八って決まってるんだけど、その部落によってまた、その日にちが違うんですね。でまた、だいたいやることは同じなんです。まあ、その部落によって、ちょっとこう、違うんです。小豆沢の場合は、まあ、あの、こうゆう着物姿ですね。そいであのう、集まって、そいであのう、まあ、あしたの二日の日は、もうどこの部落でも団体制なわけなんです。もう三人か四人、あのう、まとまって、あのう、舞をやるんですね。ところが、各部落にもどれば、もうあの、一人ず

つの、舞を、舞うんですね。まあ、いろいろ、こう、こまいところが違うんだけどね。まあ、中味はおんなじなんです。エ、だけでも、まあ、実際、行に入ってるもんだからね。ええ、練習だと思ってるんだけど、また行に入ってるんだから、気持は違うんです。

そして、あの、三十一日ですね。その朝、その大日堂に、あのう、神様、ま、もろもろ、そのう、置いてるわけなんです、いつもね。その神様を、そのう、神主さんのウチに、あのう、移すわけなんです。三十一日の朝。とゆうのは、ほれ、二日の日、あの、四ヶ部落の神様が、あのう、集まるもんだから、ええ、自分も、あのう、部落の、小豆沢の、そのう、まあね、神主さんのウチに、預けられるわけなんです。

まあ、元日は、今日は四時ですね。四時に、その、別当さんのウチですね。神主さんのウチに、集まって、でまあ、あしたの準備ですね。であのう、神様の、ま、なんとゆうか、衣裳を調べたりね。エ、またあのう、いろいろな、ほれ、あの、あるんですね。そうゆう道具が。そうゆうのを、あのう作ったり、あしたの準備ですね。まあ、そうゆのをやって、そしてまた、ひととおり舞を舞って、きてるわけです、今日も。

行と禁忌

準備ってゆうかね。もう、あのう、十二月の二十日ですね。二十日から、あのう、もう行に入ってるわけです、我々は。まあ、ふつ

うの能衆は。そいで、そのう、御神体を舞う人は、まあ、あの、十五日ぐらいからねエ、行に入ってるわけです。その行とゆうのはねエ、そのう、この神様は、大日堂のその神様とゆうのは、あのう、シニビ(死に火)ですネエ、そいでサンビ(産火)、それからあのう、四つ足の肉ですネエ、それと、まあ、女ですネエ、この四つつを、あのう、嫌う神様なんですよネエ。だから、そのう、我々、能衆たちは、そのう、十五日または二十日からは、もう、あの、そうゆうのいっさい、禁止されるわけなんです。特別な、そうゆうあれはないんですけどもねエ、ただあのう、自分のウチで……。

だから、そのう、ねエ、たとえば、なんか、どっか、宴会でも、そのうゆうグループ的な飲み会でも、そういのに行った時には、もう、あの、お酒飲む時には、火を通した燗は飲まれないわけです。燗つきの酒は、飲まれないわけです。自分だけ、もう、冷やで、別個に、あの、飲まなきゃならないですネエ。そいで料理も、あの、煮た料理とか焼いた料理ってゆうのは、いっさい食べられないわけですネエ。もう、あのう、ほんとのまあ、野菜とかね、ほんとの、火を通さない、料理だけを食べられるわけですよネエ。まして、いくら夫婦でも、もう、手を握ることもできないですネエ。まあ、そうゆう、敵しい、あの、行を、まあ、あの、行なった結果の、まあ、あしたの、奉納なわけなんですよネエ。

それだけは、まあ、守ってるつもりなんですよネエ。でも、やっばりねえ、なんかこう、年々、こうねエ、なんとゆうか、年数が、重な

ってゆくにつれてねエ、やっばりあのう、そういう気持ちってゆうのは、固まってきましたよネエ。始めて二、三年とゆうのは、まあねエ、なんかこう、たいしたことないように、感ずるんですけども、だんだんこら若いってゆうけれどもねエ。それでもまあ、なおかつ、そういうヤドに行けば、あのう、まあ、垢離を取るんですよネエ。あの、水をかぶって、それで身も心も、まあ、清めてですね、それで、あのう、ま、そのウチを出てくるわけなんですよネエ。

やっばり、まあ、なんとゆうか、やってる時には、その、舞を舞ってる時にはねエ、もう、無事に終わるようになってゆう、それしかないですネエ。やっばり、その、やってる中で、なんか、そのねエ、あの、あるってふうなれば、もう、自分だけで済まないってゆう気があるんですよネエ。その家族、親戚、ねエ、こちらへんでは、あの、ケチが付く、ってゆうんですネエ。もう、ハア、一年間ねエ、もうなにかあっても、ハア、そのためだ、ってゆうふうな、あれがあるわけなんだから。そいで、それやってるかぎり、もう、何事もないようにってゆう、もう、神に祈り……。でもう、始まる前とか、もう、関係ない日は、まずねエ、自分たちの家内安全と、健康ですネエ。そういうの、祈ってるんだけれども。

いや、今年もねエ、ウチの場合も、あのう、ウチの、十二月の二十日、二十二、三日かな、その時に、ウチの姉が、まあ、東京で出産したんですよネエ。だから、まあ、ウチのおふくろが、行ったんです

よ。だからもう、この大日堂舞樂が終わるまで、も来られないですよね。そんなに厳しいんですよ。そうでなきゃ、または、あのう、わたしがこのウチから出て、あのう、ほかの能衆のウチに、もう、めんどろになるよ、世話になると、その、二日の日終わるまでですよ。だから、そうゆうふうには、一年間の内になんかあった場合はね、どっちかなるわけなんです。自分がウチから出るか、その、ウチの者が出てかなきゃならない、その、たずさわる人は。まあ、そっちがある、ウチにいる場合は、もう、舞う自分が、この、ウチを捨てて、もう、関係なく、ほかの能衆のウチで、世話になるわけなんです。そうゆうのは、もう、決まってるんですよ。厳しいんですよ、ほんとうは。

大晦日はね、そうゆう、ことはやるんだけど、まあ、料理はぜんぜん違うんですよ。料理は、もちろん肉とかそうゆうのはだめなんだけども、火を通していいんですよ、ウチ内で、あの、やることに対しては。ほかの、他人の火を混ぜることは、絶対禁止されてるんですよ。だから、そうゆうふうには、まあ、二十日からですか、そうい行が始まってからは、ほかの人が来て、一坏いっしょにやるとか、なんか、あのう、肉屋に行ごとか、そうゆうのは絶対できないわけですよ、ね、もう。お茶だけは、もう、許してもらってるからね。……。まあ、これは、疑うあれば、きりないんですけどもね、まあ、おたくさんの場合、ね、まあ、遠いところでも身内でも、なんか、あるとも限らないし、ないとも限らないし、ね。なければ幸い、いいん

だけでもね。もし、あった人と、その、火を混ぜた、てゆうふんなればね……。そうゆうのはもう、すっごくこうね、厳しい神様なんです。我々もね、まさかとは思うんだけど、でも、こう、長年、やってればね、やっぱり、なんかあれば、ってゆう、あの、その年はなかったものにしても、そうゆうのを破って、来年、に、すぐ、なんかあったら、困るな、ってゆうことでまあ、こうゆうふうにしてるわけなんです。ね。

祭事次第

(正月二日ニマズスルトハ)それは部落ごとですね。今夜、あすの朝ですか、で、我々が、あの、その、神主さんのウチに寄って、その御神体、神様を、まあ、あの、今度は、マカナイヤドのほうに、いっしょに、持っていくわけですね。小豆沢は、まあ、毎年違うんですよ。これは、あのう、マカナイヤドってゆう、あのう、ヤドが決まってるんですよ。ま、これは昔の、あのう、なんとゆうか、伝えからええば、そのう、新築したウチですね。それは、そのう、神様から、そのう、清めてもらう、とゆう意味があるわけなんです。だから、そのウチを、ウチ全体、また、ウチの中の家族ですね、そういう人たちがひっくるめて、あのう、神様から清めてもらってゆう意味で、マカナイヤド、昔は、あのう、そうゆうマカナイヤドの人たちから、お願いしてくられたんだけど、今はまあむずかしくなりましてね、やっぱり信仰する人たちが少なくなっちゃってゆうかね。それで、あのう、まあ、そうゆうヤドがなければ、能衆たちのウチの、

ウチでやるとか、そういふうんたつてきている状態ですネエ。(今度ノ)ヤドは、あのう、ま、能衆の一人のウチ、ただけどもネエ、ま、そのウチも、最近、新しく建てたウチで。あのう、畠山与七郎、つてゆう、その人は、まあ、小豆沢部落の、笛を吹いている人なんですネエ。そのウチの屋号は、あの、フエフキダつてゆう、あの、屋号なんですネエ。もう昔っからの、その、笛吹き、ウチだけなんです。

そのマカナイヤドに、各自が、まあ、集まるわけですネエ。それで、あのう、まあ、そのウチの人がたと新年の挨拶をして、そいでこんど、そのウチの人たち、まあ、ウチの人たちと言っても、我々と直接、あのう、話するのはもう、男だけしかできませんからねエ。料理も、まあ、男しか手がかけられないわけですネエ。で、そのう、マカナイヤドに各自集まってエ、そいであのう、まあ、新年の挨拶をして、ソッで、あのう、まあそのウチのおもてなしを受けるわけなんですネエ。まあ、ごちそう、てゆうかねエ。あの、まあ、腹ごしらえをして、そいであのう、まあ、垢離をとつて、風呂に入る人もいるけどもネエ、そいでまあ、清めて、そいでこんどあ、あのう、衣裳を着てですネ、そのしたくをして、ソッであのう、そのウチの中で、まあ、あのう、ひととおりの舞をして、で、そのウチを清めて、その、舞を舞つてですネエ、で、そこから、ま、出陣てゆうか、出るわけですネエ。

(頭ニカブル物)この、付けてるのが、我々だけなんです。これ

は、あのう、まあ、ヤエガサと言ってね、もう、昔っからの、日本紙で、あのう、和紙で付けてるわけですネエ。まあ、このう、ヤエガサだけは、もう、すごく古いやつですネエ。代々、毎年使つてます。(由来ハ)ああ、そうゆのはねエ、やっぱり、これだつてゆうのは、あの、わからないですネエ。ほんとのまあ、昔の姿そのまま、つないでける状態だからですネエ。ほかの部落なれば、また、かぶる物が違うんですネエ。

(マカナイヤドノ出発ハ)それがア、四時過ぎなんですネエ、出るのが。けっこう時間がかかるんですよ。そいで、そこを出ればねエ、もう、あの、毎年、あの、こう、寄るウチが決まつてるんです。そこを、あのう、そこに寄つて、やっぱり同じ舞をしてですネエ、そいで、あのう、ちょうど、神主さんのウチの、裏側みたいな、こう、所があるんですネエ。そこで、そのう、大里部落と合流するわけですネエ。だから、こう、だんだん、こう、なんてゆうか、大きくなつてゆくわけですネエ。ソッで、ここに来た時はもう、ぜんぶ集まつて、もうクライマックスになると……。だから、まあ、頭ッからこういとこ見れば、そう、たいしてなんとも思わないんだけども、こう、一つ一つが、こう、だんだん、こう、おっきくなつてぐ、つてゆう、そのう、なんてゆうか、順序を正して、見ることが、わたしは、かえつて、すごくこう、ええ、貴重のような気がするんですネエ。

七夕のこと

ここらへんでは、ほかにおつきい行事とゆうのはないですね。あとはまあ、夏の七夕とかねえ、そういのなれば、もう、流すのが、まあ、米代川。火をつけて、ですね。今でも、ですね。ウチで飾って、それで、あと、あのう、まあ、あのう、各町内から、そのう、ト一口ですねえ、太鼓と、こう、出し合って、そつであのう、まあ町内を巡って、そつであのう、川に行つて流すと。まあ、町も飾るけどもねえ、町の中もねえ。八月です。まあ、各地区でやってるんですけどもねえ、この、八幡平とか、花輪とか、ねえ。小坂とか、やってるけども、花輪の七夕は、やっぱりねえ、ここらでは、おつきいです。でも、まあ、弘前とか、青森のああゆうのに比べれば、ぜんぜんだめなだけどもねえ。いちおう、ああゆう、ト一口なんか……。けっこう古いですよ。何年ぐらい前はわからないけども、まあ、あのう、花輪のお祭りですねえ、あの、花輪囃子、あれにもう付き物、つてゆうかねえ。花輪囃子もいいですよ。ダンが出るんですよ。その、花輪囃子の伝えは、なんか、あのう、京都の、祇園囃子ですねえ、あの祇園囃子は、どちらかと言えば、女のほうの、なんか、神様みたいな形らしいですねえ。で、花輪の場合は、男の、そのう、神様の、ま、囃子なんですよ。だから、すごく、あのう、なんとゆうか、迫力があるつてゆうかねえ。同じ、あの、ダン、持つてつてやるんだけども、同じような感じなんです、あのう、京都の、あのう、祇園囃子と。だけでも、リズムとゆうか、それがぜんぜん違うんですよ。もう、外国にも行って来たと思うんだ、ですねえ、花輪囃子は。(小

豆沢へ) ええ、しますよ。するけどもねえ、まあ、こうゆう、鹿角つてゆうか、ここらへんの、まあ、行事つとゆうのはねえ、ほかでやれば、すぐ、だんだん、こう、おつきくして、観光化してねえ、有名になるとか、そうい感じになってくんだけども、なんとゆうか、毎ッ年、そのう、昔つからのものを、そのまま、あのう、つないでゆくつてゆうかねえ、そうゆう感じなんです、ねえ、この、鹿角の、その、行事つてゆうのは。わたしは、そうゆうほうが、好きなんです、ねえ、どちらかと言えばねえ。なにも観光化なんてゆくでしよ、今。

2 正月二日の見聞録 (※印は話)

00..20 黒沢俊彦さん、玄関で塩で身を清める。神棚にむかつて拝礼。家を出発。同行者一人。途中、大日靈貴神社の脇入口にて拝礼。別当家にむかう。平安神社の神棚にむかつて拝む。すでに三人到着している。拝殿中央のストーブを囲んで談笑。

00..35 太鼓を連打。鈴を振ったりなどして、各自、簡単に舞う。

00..40 別当家出発(初め、太鼓をたたきながら)。一行七人。高張提燈、太鼓、太鼓打ち、幡を持つ二人、御幣持ち、御神体の入った櫃を負う人、の順。マカナイヤド近くで太鼓を打つ。ヤドでは、それまでついていた電燈を消す。

00..45 マカナイヤドに入る。太鼓を打つ。子どもが一人付き添う。今年のヤドは畠山与七郎家。

神棚に御神体を安置。一人ずつ順に拝礼。終わつて小憩、雑談。そ

の他の能衆等、逐次参集。

01・08 一同、着座。酒がつかれる。そば・御飯・味噌汁・漬物が出される。

02・25 家裏の小川で垢離を取り始める。

※(コノ川ノ名ハ)歌内川。山の奥から流れてきます。ここウチは、水の頭と書いてカドノカシラとゆうんです。昔から、カドノカシラとゆう、屋号があるんです。水のいちばん先に、使ってるから、それを使ってるために、水の頭と書いて、カドノカシラとゆうんです。

02・35 水垢離を取ったあと、ふたたび座敷にもどり、衣裳を調え始める。紋は五本骨の扇に日の丸が描いてあり、これは佐竹侯の紋所。

※(今、アソコデ着テイル人ハ)あ、あの人は、権現様を舞う人です。獅子頭。役職の名前はですね、オカシラ(御頭)。阿部賢三郎さんです。(アノ子ドモハ)その、うしろにしっぽがあるんですけれども、そのしっぽを持つ役。そのほかに、舞がふたいろありますから、あのう、もう一つはですね、あのう、田楽舞やる人がいて、その田楽舞の先頭に立つ人もですね、そのう、一つのなんてゆうか、グループの責任者、ってことになるわけなんです。(オカシラノコッチ隣ノ人ハ)これは、あの、あれです、田楽舞の時に、あの、鼓を持って、舞う人です。役の名前はですね、特になんとゆうって、呼び方はないんですが、まず、あのう、舞の笛の音がですね、ピッピッピッと、こうゆうんですから、ピッピマイ、ところ言ってますがね。(アノ青

イ衣裳ハ)あ、これ、直垂と呼びます。(衣裳ガ新シイノハ)あの、去年、作りました。こっちのほうのが、伝統的なあれです。三十年くらい前ですね。今回の場合は、国から重要無形民俗文化財の指定を受け、それとともにお金がですね、補助になりましたので、そうゆう機会を利用して、ま、作らなければ、ふだん作れませんので、そういふうにしました。(ハイテイルノハ)これはワラゲツです。(祭り用ノ作り方ハ)いや、特にはないですがね、あのう、一般にはくのと、ちよつと違うのはどこかとゆうと、かかとの部分ですね、ふつうの場合は、かかとがああゆうふうなものが付かないで、ふつうの、こう、つかけのような形になるわけですよ。これはほれ、激しい動きをするものですか、脱げないようにすること、もう一つは、今日は雪降ってないですけども、雪が深いもんですから、雪が、この、うしろのほうへ入らないようにするために、ああゆうふうな、うしろへ、かがとにね、特殊なものを付けるわけです。(作ル人ハ)これですね、ワラゲツ、現在作れる人ってゆうのは、二人か三人くらいしかなくてですね、さっきね、そこにおった、あの、お爺さんですね、あの方と、それから、あ、その人が作ってくれるんです。これ、いちばん問題ですよ、作る人がだんだんなくなって。若い者も覚えたいと言ってますけれども、なかなか、ね、やっぱり、そのう、ふだん作らないで、その時だけとゆうことになるとゆうと、これ、もうたいへんですからね。(頭ニカブッテイルノハ)そっちの、きれいなやつが、これ、ポンテンカムリですね。(アノ藁デ作ッタモノハ)あれ

は、さっき言った、かかとにやるやつです。(カカトニ付ケルノトワ

ラグツトハ別ニ作ツテアル)はあ。そして、はく時に、そのう、かか
とにこうやって、付けるわけなんです。(アノ、手ニハメテイルノハ)

これは、あれですな、熊の皮ですな、熊の手。寒いですから。(ソレ
ヲ付ケル人ハ)太鼓です。こう、手、こう振りまわすもんですから、

まあ、今日はあったかいですけども、つめたいわけですよ、そいで
ね、かぶせるんです。(アノ黒イ手甲ハ)やっぱり、あれは、手甲は

手甲ですな。笛の人がたも、やっぱり、あのう、常に、手を、こう出
してやってるもんですから、手、つめたいわけですよ、そいでま

あ、手甲かけて。ほかの人はなんにもやりません。(白足袋ト黒足袋
ノ人ノ役ノ違イハ)いや、特にそういことはいませんが。(アノカ

ブルモノハ)アヤガサ(綾笠)。金銀錦綾つと言つて、つまり、いろ
いろとりどりの冠と、こうゆう、今はもう色が薄れて……。このアヤ

ガサだけは、ずいぶんしばらく作んねだからな。五色、使うんです
よね。五色の紙ですよ、和紙。赤に青に黄色、白に、なんだっけ、も

う一つ。それ、何年てかぶってるわけです。だから、色がさめて、こ
れ、あの、権現さんの色、ああゆうふうな、あれであったわけなんで

す。長年かぶってれば、こういう色になってしまふわけです。(カブル
人ノ役ハ)この人がたは、田楽で、今やるけれども、田楽舞の。

03..15 衣裳調え終わる。

03..20 座敷に車座になり、酒を酌み交わす。朱塗りの盃、三重ね
で、権現舞の人から飲み、左廻りに一巡。このあととはほとんど沈黙

のままという。

※えー、マジ、出発の式が終わりました。で、マカナイヤドを出てか
らは、これは、さまざまあると、思いますけども、撮影のために、な

んとか、これは、あるかもしれないけども、どうかみなさん、本日
は、よろしく、徹底して、舞い、これ以上ない舞台を、かなして、い
ただきます。よろしくお願いします。(別人)はい、どうも、ありが
とうございました。

03..40 能衆が飲み終わると、控えの座のお婆さんたち、それから
賄いの女の人たちにも、お神酒以下がふるまわれる。

03..50 笛。御神体にむかって、右から笛、あと能衆、二列に縦
隊、太鼓がいちばんうしろになって並ぶ。ミコ舞・カナテ舞・権現

舞。権現舞が始まると、列席の人は随意に賽銭を投げ、各自に拍手を
打ち、拝礼。

04..04 舞い終わって、権現舞役が賄いの人たちにお礼を言う。太
鼓。マカナイヤドを出る準備。

04..08 マカナイヤド出発。道中、太鼓を打つ。

04..16 山本徳太郎家到着。ここは、お宮が焼けた時に尽力された
家という。ミコ舞・カナテ舞・権現舞。家人、拍手を打って拝礼。舞

い終わって、能衆は各自、主人と新年の挨拶。酒のふるまい。

05..00 山本家出発。途中まで太鼓打つ。

05..07 別当家到着。平安神社でミコ舞・カナテ舞・権現舞。新年
の挨拶。権現舞・田楽舞。ことし成人する若者が居合わせていて、は

ちまきに五色の切り紙をはさんでいる。田楽舞の時に、そのまわりを廻わる。

※(別当家デハ)舞、まあるだけんなってるス。あのう、神葬祭、家の人がたが、あそこサ祀られてるわけです。神葬祭もありますからね、この部落で。そうゆう関係で、あそこへ建ってるわけなんです。

05・30 別当家出発。太鼓を打ち。ここから、若者たちも幡・旗などを持って行列に加わる。空はだいぶ雲が切れて、星がきれいに見える。頭上に北斗七星。

05・36 ふたたび畠山家。ただし、今回の来訪はマカナイヤドとしてではなく、フエフキダとしてのもの。玄関には薦が敷かれています。ミコ舞・カナテ舞・権現舞。権現舞の途中で、家人は獅子頭にむかって拍手を打ち、拝礼、賽銭を投げる。休憩となる。

※(アノ子ハ)まず、親が出ている人が、いっしょに連れて来るから。そう、十二、三です。ちょうど、年の似合うような人が、いるわけですよ。その人へ頼むわけです。(名ハ)斎藤真一、です。四年かな、五年かな。もう三年ぐらいでやめます。あのう、衣裳が入らなくなるから。(アノ進行役ハ)オトモ。神の御供です。畠山熊五郎さんです。(世襲カ)いや、違います。あの人は、去年から。

参会者にも酒・そばがふるまわれる。

※(祭りノ中心ニナルノハ)あの、やっぱり、権現舞やる、オカシラ、って言ってます。(楽ハ)フエフキに、太鼓を打つ人はツヅミウチ。(別当家デ初メテ使ッタ小サナ鼓ハ)あれは、テンゲツツ、って

ゆってます。(別当家デダケヤル)そうです。あと、あの、ほんとの舞台にあがった時だけです。なんだか、あれは、いちばん、古いような、話ですね。(アソコデ、俵ヲ背負ウングサガアッタノハソウイウ意味)は、はあ。(ササラハ)そ、あれは、ササラ。やっぱり、あの、豊作舞のような、あれですね、田楽舞と言って。小豆沢だけです。(太鼓ヲ負ウ人)あれは、ツヅミセオイ、ってゆってます。それから、あの、権現、箱をしょって来たでしょ。あれは、ゴンゲンモリ。

(——博士トイウノハ)は、この部落じゃなくてス、あの、谷内・長嶺は、あります。この部落は、権現舞と田楽舞だけです。あと、あのう、カナテ舞と、ミコ舞とゆうのは、四ヶ部落、ぜんぶ、どこでも。

ホンマイとゆうのは、ここでは、権現舞と田楽だけです。(山本家ニ行ク理由ハ)あのう、大日さん、火事で焼けたでしょう。昭和二十四年です。その時、あそこ、お爺さんが、大日さん建てる時に、たいした、御神体やらなにやら、たいへん、あのう、寄付してくださったんです。それから、あそこへ、ほれ、寄るようになったんす。ここ(フエフキダ)はもう、昔から、宮司さんから、ここサ来るス。それは、どうゆう関係、てゆうかな、やっぱり、昔、このへん、ずうっと、このう、部落が、小豆沢部落とゆうと、このへんが、ずうっと。下は、部落、小豆沢でないですよ。ほんとの地名は、この、上あがってからです、小豆沢とゆう地名は。あのう、今の神社建ってる所とか、駅までは、小豆沢の地名じゃないス。だから、まあ、ずうっと、村を歩いたんでしょね。だから、ここサ入った、と思います。神様の休むため

です。マカナイは、毎年、変わります。新しくウチを新築したウチな
んかは、こう、神様を、鎮めてもらって、祓ってもらいます。それか
ら、ここへは、毎年、来てます。もし、よそのウチでマカナイやった
あとには、終わって、あのう、宮司さんのウチへ行行って、それから山
本さん、それから、ここサ来るんです。ここは毎年、来るんです。そ
れからまだ、ずうっと行くんす。今度は、あのう、天王さんてゆう、
その、小さいお宮さん行きます。あの人は、橋本運吉です。マズ、
このへんでは、天王さん天王さん、て言います。なんだか、お宮の名
前は天王さんて、てゆう名前じゃねえらしいんだけど。なんだかな、
八坂神社かな、そうゆう……。その下の、ことは、もう、白山、てや
っぱり、大きい昔からの、大家さんがあります。そこまでが小豆沢。
そこサ、やっぱり、こうゆふうに休んで、いると、大里が来るわけ
です。あそこの坂、あそこで大里と合流するわけです。やっぱり、あれ、
大里と、昔からの古しいウチだから、大里と合うために、神様が休ん
だ、ウチで、あつたと思います。そこ出ると、すぐ、あのう、宮司さ
んのうしろは、西ノ下、つてなってます、地名が。だから、ニシノカ
クチ、つて、そこでいっしょになります。大里の人がたも、あの、上
へあがつて来ます。あの、坂ですね。(大日堂ノアル所) あそこは、
堂ノ前、とゆう地名です。やっぱり、昔からお堂があつたから、堂
ノ前と言つたでねえスカ。(駅ノアタリ) あそこは、あのう、小山、
なってるス。小豆沢ってゆうのは、大日堂の脇の、大きい川、米代
川、あつたでしょう。あの川と、道路の上のほうが、小豆沢です。

(行ハ) ええ、十日前。いちばんこつちの人と、それから小さい子ど
もさんと、わしは、十五日からです、十二月の。昔は、よそのウチ
で、お湯も飲まれねえし、御飯も食べられないし……。十二月の十五
日と、あの、シメ張るわけです。それから、行に入ってることになつ
てます。あとの人がたは、二十日の日です。宮司さんは、もう、そ
の、十二月入ると、ハア、もう。(宮司ハ) 今は、歩かないです。ほ
んと、お堂行つた時だけです。(舞ヲスル座敷ノ名ハ) 特別ないで
すね。

06..20 休憩を終わって、出発の準備。

06..24 太鼓。空はだいぶ白々と明けてくる。

06..26 畠山家出発。出てまもなく笛・太鼓。また、天王さん近く

でも太鼓・笛・鈴。

06..30 天王さん到着。笛・太鼓。村の人たちも起き出して、見物
にやってきて、拝礼。権現舞。三十九分に舞い終わり、田楽豆腐のふ
るまい。

06..45 天王さん出発。

06..47 白山さん(斎藤安三家)到着。ミコ舞・カナテ舞・権現
舞。この途中で拝礼。焼味噌のふるまいにあずかりつつ、大里の到着
を待つ。太鼓の音を聞いてニシノカクチにむかう。

07..44 大里の一行ニシノカクチに到着。太鼓・笛。続いてまた太
鼓・笛に鈴。権現舞。笛。権現舞。

08..00 小豆沢が終わり、大里と対面。大里の工匠舞。双方の代表

による新年の挨拶。酒・みかんのふるまいがある。

※(コノ畑へ)ここはナシ、ニシノカクチ、つてゆってます。これは、あの、宮司さんの畑。(幡は)あの、カシラ付いたのある、あれは、大龍神。あれは小龍神と言います。

08・07 大里を先頭に、別当家の屋敷内を通過して、大日堂へむかう。本来は、別当家の前をおりる坂すぐの所を左折、杉並木の道を行くべきところ、NHKのテレビ撮影のため、大通りまで出て行く。

08・18 大日堂の姥杉のもとで円陣を組み、舞い始める。

08・21 宮司による修祓と挨拶。笛。権現舞。

* (案内放送。以下同じ)ただ今行なわれておりますのは、地蔵舞でございます。ちょうど姥杉の根方にある祠の前で、権現舞を舞いながら、行列を作って、並んで、小豆沢・大里と、二回舞いまして、社前の庭を三回廻わるわけでございます。なお、その祠の所に鳥居が立っております。地蔵様に鳥居というのは、なんか、こう、違和感を感じると思いますが、やはり、昔の、神仏混淆時代の、名残ではないかと考えられております。この地蔵舞が終わりますと、これから花舞になります。この庭を三回廻わりまして、そのあとでさざはし下で、ミコ舞とカナテ舞が舞われるわけでございます。それを花舞と称してございます。この花舞がちょうど終わりました、殿内では、地域の若者によりまして、モミオシの行事が行なわれるわけでございます。そうして、このモミオシの行事が行なわれている間に、堂のコシ(外廊)を各部落の龍神幡が三回廻わるわけでございます。この御上乗を終わら

まして、堂内の中にあります舞台で行なわれるのが、無形文化財に指定されておりますザイドウになるわけでございます。

08・36 姥杉の前での権現舞が終わったあと、庭を、一同一列になって右廻りに廻わる。笛・太鼓。庭では、今度はお互いに手を組み合せて、鳥がはばたくような舞。

*ただ今行なわれておりますのが、花舞でございます。社殿正面のさざはし下で、ミコ舞・カナテ舞が行なわれております。

太鼓・笛・舞。今のはお堂の入口の所、御幣にむかっただの笛。これからモミオシ行事。神社の前の階段の所で、御幣にむかっただ、獅子がかみつくしぐさ。

08・48 お堂の中ではモミオシが始まる。「インヨーヨイ／＼：」のかけ声。床を踏む足音。やがてモミオシ終わる。

*続いて御上乗でございます。四ヶ部落の能人が、龍神旗を先頭に、長嶺・大里・谷内・小豆沢の順に階をのぼりまして、社殿の縁を行列正しく三回まわるわけでございます。そのあと、境内のかたに旗上げをするわけでございます。旗上げは非常に危険でございます。消防団の方々の指図に従いまして、場所をあけていただくようお願いいたします。今、会場には小豆沢の若者たちが、旗上げに待機しております。東に、谷内・小豆沢、西には大里・長嶺と、高く旗がかかべられるわけでございます(この間、笛)。龍神のカシラの付いたものを、カシラハタとも言っております。小さな、カシラの付かないものをホソコハタと言っております。まもなく旗上げでございます。

(以下、堂内にて)

09・01 旗上げ終了。

ミコ舞

* 宮中舞樂の太平樂にあたると言われております。長嶺・大里・谷内・小豆沢の順で、天つ神、すなわち天の神に対する舞でございます。これから行ないますが、ミコ舞でございます。

09・14 カナテ舞

* 次はカナテ舞が奏されます。宮中舞樂の萬歳樂にあたると言われております。順序はミコ舞と同じでございます。国つ神、すなわち地の神に礼拝を捧げる舞でございます。伊勢神宮の賀殿という舞樂がございますが、これもやはり同じような振付けで、同じような舞い方でございます。

大小行事

* 今、舞台で行なわれましたのが、**大小行事**でございます。大里と小豆沢の舞台元が、**サツヘイ**を立てまして、神籬をいたします。撒錢撒米をいたしまして、舞台を清浄に抜い清めるわけでございます。この舞台が清められたところで、これから**降神**の儀が行なわれます。イッシンマイはショウインノツキと言われましたが、これは神籬に天つ神国つ神のおくだりを乞うのでございます。そして祝詞奏上が行なわれます。この**祝詞奏上**が終わりますと、これよりいよいよ、御神意を慰め奉るといわれる神事舞樂、すなわち**ホンマイ**(本舞)でございます。**ザイドウ**が行なわれるわけでございます。この舞樂が、千数百年の

昔、元正天皇の養老二年、西暦で申しますと、六二〇年にあたりまして、今から一二三〇年ほど前になります。この養老二年、当大日堂再興の時、都から音楽博士をおくだしになりまして、長久に怠らないでつとめよと、大里・小豆沢・長嶺・谷内に、それぞれ各種目を分担して、教え伝えられたと言われております。それから連綿と一二三〇年に及ぶ現在まで、伝えてまいったわけでございます。この舞樂は、昭和五十一年五月に、法改正による、第一回の、国の、重要無形民俗文化財として、指定されております。

09・38 権現舞

* 今、舞台にのぼりますのは、**権現舞**でございます。継体天皇の第五皇子、すなわち五ノ宮権現の舞と言われております。小豆沢の能人によって奉仕されます。

駒舞

* 次が、**駒舞**でございます。大日堂が再興いたしまして、御遷座の時に、元正天皇より奉納された月毛の神馬、二頭の御神馬を象徴する舞と言われ、また一説には、五の宮皇子の御乗馬の舞とも言われております。この舞具には、その頃の馬の皮が馬頭に付いておりまして、ふだんは非常におとなしい人にも、この舞具を付けますと、荒駒が舞おうとするがごとく勇ましくなると言われております。第一礼拝、第二馬替え、第三一人舞、第四片手舞、第五仁義、第六大車、第七礼拝と、七節になっておりまして、大里の能人によって、奉仕されます。今日は、皆さんにもさきほど申しましたけれども、NHKの全国生中

継の放送がございしますので、これから以後の、各カメラマンの方、たいへん恐縮でございしますが、ストロボをたくのを御遠慮願いたいと思えます。(こんどは手に日の丸の扇を持ち、くちわに神符をはさんでいる)。

10・12 駒舞終了。

*次は鳥遍舞でございします。継体天皇の後宮となりました、ダンブリ長者の娘吉祥姫を、葬る様を振付けた舞と言われております。したがしまして、墓固めの舞、あるいはモリコフジケなどとも言われております。六人立て、大博士舞、二人舞の三節になっておりまして、長嶺の能人によって奉仕されます。なお、二人舞の終わり頃に、お守りを撒くわけでございしますけれども、このお守りを拾った人は、その年の幸運を拾うと言われておりまして、争って拾われるわけでございします。大博士・小博士がお守りを撒くわけでございします。ちょうど正面のほうにむかって撒くわけでございします。

鳥舞

*次は鳥舞でございします。この地域開発の先駆でございましたダンブリ長者飼育の、鶏の舞と言われております。膝切り・耳切り・腰切りの三節になっておりまして、大里のかわいらしい童児によって奉仕されます。

五大尊舞

*続いて五大尊舞でございします。袴・脚半・打腰というものを身に着けておりまして、白グンテイをかぶり、面を付け、大刀をつらぬき持

って舞台にのぼり、大博士は左に鈴を持ち、太鼓に合わせ、祭文を唱えながら、舞うものでございします。これは金剛界大日如来、胎藏界大日如来が、ダンブリ長者に化身いたしましたして、四大明王がその臣となって仕えた形を振付けたと言われ、ダンブリ長者の舞、両部大日尊四大明王の舞などと言われております。谷内の能人によって奉仕されます。一般に五大尊というのは、五大尊明王の略でございまして、密教で信奉する五大尊は、不動・降三世・軍荼利夜叉・大威徳・金剛夜叉を称して、五大尊と申しております。ただし、この大日堂舞楽における五大尊は、大日如来・普賢菩薩・文殊菩薩・八幡菩薩・不動明王としておりますが、大日如来を、金剛界大日・胎藏界大日の二体に分けております。神殿にむかって右手の大博士が、金剛界大日でございします。向かい合っているのが、胎藏界大日でございします。したがしまして、一般に言われております、密教で申し上げます五大尊とは、大日堂舞楽における五大尊は違うというわけでございします。(太鼓・唱言)

工匠舞

*これから行なわれますのは工匠舞でございします。直垂・脚半・立烏帽子姿で、二十センチほどのシデを持って、静かに舞う舞でございまして、大日堂の本尊である御神体を刻む様を舞にしたものだと言われております。一般に番匠舞・公郷舞、あるいはバチコ舞・バチドウ舞などとも申しております。大里の能人によって奉仕されます。伊勢神宮の賀殿とゆう舞にまったく似ております。

田楽舞

*次が大日堂舞樂の最後を飾る田楽舞でございます。直垂・脚半・綾笠をかぶりまして、舞台にのぼります。その一人が小鼓を持っておりまして、この人をザイドウガシラと申しております。ほかの一人は太鼓、四人がササラを持ってあいつとめるわけでございます。この小鼓は、秋田新観光三十景になりました湯瀬溪谷にかかる、天狗橋をかけた、天狗から譲られたと言われておりまして、天狗鼓とも言われています。ダンブリ長者が農夫を慰めた舞とも言われ、非常に珍しく、古い形をくずさないで伝えていると言われておりまして、五穀豊穰祈願の舞でございます。小豆沢の能人によって奉仕されます。

*田楽舞で、今日のザイドウのぜんぶがめでたく終了いたしました。各能人は、東に小豆沢・谷内、西に大里・長嶺とあい対して、整列し、直会の儀を行なうわけでございます。互いに労をねぎらい、おのおの引上げるわけでございますが、今日は舞楽保存会の表彰式がございますので、所定の位置にみなさん着かれましてから、その後直会の儀をとり行なうようにしたいと思います。御神徳を奉賽される皆様方、今年によりよい年であることをお祈りいたします。これで放送を終わりたいと思います。

11..50 終了

※(コレハ)なんとゆえばいいかな。紙帽子。毎年、こう、新しくたしてゆくんです。和紙です。(大里ハスベテ白)あ、そうです。(名ハ)さあ、なんとゆうのか、わたしら、ちょっとわかんないです。こ

れは、あの、大里では、通称、カミボウシと言います。(子ドモノカブテイルノハ)これ、ワタボウシ。中のほうに綿を入れてましてね、あの、蚕につくった、あの、絹、あれ、こう、かぶせておりますけどもね。(鳥舞ノ子ハ)えーっと、三年生ぐらいからやっておりますけれどもね。中学校二年ぐらいまでスカ。

12..08 能衆の功労者の表彰式終了。このあと、直会があるという。

12..17 長嶺の人たちが、また行列をつくって、太鼓をたたきながら神社を退出。